

筑波大学について考える→実は教育学部・教育大学の話にもなります。

筑波大学も人気のある大学ですし、周りを見渡してみると、筑波大学出身の先生も多いので、親しみのある人もいるかもしれません。また、某名家の方の進学先としてもご存じでしょう。そんなよく知られている大学の割に、そもそもどんな大学なのかということについてはよく知らない人も多いと思います。そこで、今回は、そのルーツや特徴について考えてみます。

筑波大学

筑波大学のルーツは1872年(明治5年)設立の**師範学校**(日本初の官立教員養成学校)にさかのぼります。その後、**東京師範学校**→**高等師範学校**(この頃、**体操伝習所**を統合…これが**筑波大学体育専門学群**の源流の1つ)／また、**嘉納治五郎**(柔道の父!)が校長)→**東京高等師範学校**→**東京文科大学**(このあたりは非常に複雑で、東京高等師範学校は、形式上、東京文科大学の附属学校とされました)となっていきます。

戦後に、東京文科大学を中心に**東京教育大学**ができます。ここでは教員養成、教育学研究、各学問の研究が行われることとなります。これが筑波大学の直接の母体となるのです。1960年代後半に、東京の過密化と筑波学園都市構想により大学移転が進められ、1973年に**筑波大学**が開学、東京教育大学は1978年に廃止されました。

以上から、いくつかの謎が解けますね。Q.何で筑波大学の附属校が東京にあるの?→A.もともと東京にあった大学だから。

Q.何で筑波大学の体育が有名なの?→A.そもそも日本の体育教育を作った体操伝習所がルーツだから。

ここまでが、ちょっと調べればすぐわかる筑波大学の沿革です。

実はここからが本題です。途中で出てきた東京高等師範学校、東京教育大学に着目してみます。

東京高等師範学校からの視点

まず、東京高等師範学校の位置付けを見てみます。全国に作られた**師範学校**は、小学校教員の養成学校です。これらは**地方国立大学**の教育学部のルーツとなっています。**静岡大学教育学部**や、**愛知教育大学**は**師範学校**をルーツとしています。これに対し、**高等師範学校**は、中学校(当時:例えば見付中学など)の教員や師範学校の教員、校長や教育行政官を養成するためにつくられました。その筆頭になるのが**東京高等師範学校**、**広島高等師範学校**(**広島大学**のルーツ)です。この2校が特に大きな存在感を持っており、今でも教育界では「**東の筑波、西の広島**」と並び称されています。他にも**金沢高等師範学校**(→**金沢大**)、**岡崎高等師範学校**(→**名古屋大**)があり、女子高等師範学校として**東京女子高等師範学校**(→**お茶の水女子大**)、**奈良女子高等師範学校**(→**奈良女子大**)、**広島女子高等師範学校**(→**広島大**)がありました。これらも教育系の伝統大学と言えるでしょう。

東京教育大学と東京学芸大学

東京教育大学は、もちろん今はありません。一方で**東京学芸大学**という大学があります。こちらも教育系の大学としてよく知られていますね。この**東京学芸大学**は、戦後に師範学校から大学になった大学です。同様に師範学校から〇〇学芸大学になったのは、**北海道学芸大学**(→**北海道教育大**)、**愛知学芸大学**(**愛知教育大**)、**京都学芸大学**(→**京都教育大**)、**大阪学芸大学**(→**大阪教育大**)、**奈良学芸大学**(→**奈良教育大**)、**福岡学芸大学**(→**福岡教育大**)があります。これらの〇〇学芸大学は、1966年の法改正で、学芸大学から教育大学に改称されました。ところが、**東京学芸大学**だけは、当時**東京教育大学**があったので、学芸大学のままだったのです。上記のように、**東京教育大学**は、**筑波大学**へ改組・移行し、なくなりましたが、さすがにそこから**東京学芸大学**が**東京教育大学**に改称するわけにもいかず、今に至ったということです。

筑波大学と東京学芸大学→「教育学」と「教員養成」

高等師範学校・東京教育大学の流れをくむ**筑波大学**と、師範学校の流れをくむ**東京学芸大学**という位置付けはわかったと思いますが、それぞれどういう特徴があるのでしょうか。これは「**教育学部**」で何を学ぶのか、という話になります。以前にも紹介したことがあるのですが、大学の「**教育学部**」には、「**教員養成**」と「**教育学**」という2つの立ち位置の違いがあります。勤のいい人ならもうわかると思いますが、師範学校をルーツとしている教育大学・教育学部は「教員養成」を主眼としています。これに対して、旧帝大などの教育学部は「教育学」を学ぶことが主眼です。例えば**愛知県**は、**名古屋大**は「**教育学**」、**愛知教育大**は「**教員養成**」とわかりやすい住み分けになっていますね。ある生徒が「**名古屋大**の教育学部に行って小中の社会の先生になりたい」と言っていたので、それはちょっと違うよ、と教えてあげたことがあります。

というわけで、**東京学芸大**は「**教員養成**」を主眼とする大学になります。これに対して**筑波大**はどうかというと「**教員養成**」「**教育学**」の両面がありながら、さらに「**理学**・**人文学**・**体育学**」などを扱う総合大学でもあるという、いいとこ取りの大学だと言えます。その点において、**広島大**も同様です。機会があれば、「**教育学部**」の深掘りもやってみたいですね。

少しダークな話も

ここまでも普通に調べればおおよそわかる話ですが、さらにちょっと深掘りもします。実は、「東京教育大学が筑波大学のルーツである」というのは間違いではないですが、その通りとも言えません。というのは、筑波への移転は強引に行われたという側面もあり(反対派が学校にバリケードを作って抵抗した、とか、反対運動の結果、入学試験が行われなかった、という記事もあります)、移転に反対した東京教育大の先生の中には、筑波大には行かず、各地の大学に移った人もいました。新潟大や埼玉大、信州大や、そして静岡大にも、東京教育大出身の先生が移ってきたのです。1960年代末~70年代初頭はちょうど子どもの数も増えた頃(いわゆる第二次ベビーブーム)だったので、地方の教育学部が活性化した時期でもありました。今ではその名残はあまりないですが、筑波大学が出来た影響はそんなところにも波及したのです。

今はなき図書館情報大学

筑波大学の話をするうえで、本好きとしてちょっと付け足して紹介したいのが、今はなき図書館情報大学(1979~2002)です。これは名前の通り、図書館に関するプロ養成の大学でした。現在は筑波大学に吸収され、**情報学群の知識情報・図書館学類**となっています。ちょっと地味な大学でしたが、よく考えてみれば、図書館は「分類」「配架」「アーカイブ」「検索」と、情報学の格好の題材です。つまり、ここは今はやりの**情報学部の元祖**みたいなものでした。図書館司書を目指す人におすすめなのはもちろんですが、データベースや、情報管理に興味のある人も、ぜひチェックしてみてください。

◎受験勉強について

最近、大学についての話ばかりでしたので、受験勉強についての話もしてみます。立場上、いろいろな予備校の先生・進学校の先生・大学の先生の話聞く機会が多いのですが、受験勉強で重要なポイントは以下の3点になるように思います。

- ・理解を優先しているか…解答の暗記ではなく、なぜその解答になるのかをきちんと筋道立てて考える
- ・継続が安定しているか…調子が悪くても最低限はやる。調子が良くてもやりすぎない。長期間ペースが一定
- ・自分を客観視しているか…自分の何ができていないか、何ができているか、自分の勉強法が正しいかを判断している。

授業でも話すのですが、定期テストの直前だけ勉強して乗り切ろうとする人は、結局実力がつかず、模試や入試本番でよい結果を残すことができません。むしろ、試験のあとに、なぜ自分はこの問題が解けなかったのか、次回似たような問題が出たときに正解できるか、自分はどのような勉強をするべきか、そういったことを考えた勉強が一番効果的な勉強方法です。

受験勉強は大学に入るためのものではありませんが、勉強は大学に入ってから続きます。大学はゴールではなく、さらに勉強をするための場所ですね。そうなる、勉強のやり方を学んでおくことは大事です。よく、受験勉強しても役に立たない、大学受験だけにしか使わない、という大人がいますが、それはそういう見方をしている人の意見だな~と思います。

確かに、社会に出て「武家諸法度」「ホルテンシウス法」(←歴史の基本)、「微分・積分」(←文系の大人は言いがちですね~)といった個々の事象・内容を社会に出て使うことは滅多にないかもしれませんが、「理解を優先する」「継続する」「自分を客観視する」姿勢こそが、大学に入ったり、企業に勤めたりしたときに役立つ姿勢であると言えるでしょう。

◎基礎・基本について

大学受験モードに入った人で、いわゆる「赤本」など、大学入試問題そのものに手をつける人がいますが、「**基礎・基本**」ができていないと危ないな~と思うことがあります。以下に、予備校主催の東大入試研究会に参加した時に聞いたことの一部を紹介します。東大の入試を突破するには、という話ではありますが、結局、どの大学を目指しても同じことだと思えます。

東大の問題について…

数学の問題を解くうえで重要なこと:「計算力」と「高1、高2範囲の徹底」→公式を丸暗記するのではなく、教科書レベルの定義(例:分散にルートをつける理由など)を本質的に理解していること

英語の問題を解くうえで重要なこと:基本語彙の精度→難しい単語を知っていることよりも、"authority"(権力)と"authorities"(当局)の使い分けや、"move"と"operate"の違いなど、基本語彙を文脈に合わせて正しく選ぶ力

国語の問題を解くうえで重要なこと:論理の飛躍を埋める力→理由説明問題において、A から B への論理のつながりを自分の言葉で丁寧に説明する力は、数学の証明問題とも共通する「**思考の基礎**」

古典の背景知識→文法だけでなく、仏教文化や当時の常識といった文化的背景を知っていることが、読解の強力な助けとなる。

その会で言われたことで最も印象的なことは、「東大の入試は**基礎・基本**が大事である」「**基礎・基本とは、簡単なことではなく、どの問題でも使うものだ**」という言葉でした。この考え方は、東大に限った話ではないはず。まずは**基礎・基本**をしっかりと固めたうえで、「赤本」に手をつけてみることをおすすめします。